

《ペインクリニックの神経ブロックについて》

ペインクリニックで行われる神経ブロックについて、Q&A 式で解説していきます。

① ペインクリニックとは？

ペインクリニックという言葉は、馴染みの少ないカタカナのため、なんとなくとっつきにくいでしょう。

ペインは「痛み」という意味ですから、痛みのクリニック、痛みの診療所ということになります。そうすると痛みの患者さんを大勢診療しているところ（整形外科、接骨院など）は全てペインクリニックと思われるかもしれませんが、決してそうではありません。

→ペインクリニックとは、『神経ブロック』（次の②）を中心にして、主に痛みの診断と治療を行うクリニックになります。

② 『神経ブロック』とは？

実際に説明するのは、なかなか難しいのですが…簡単に言えば、「神経ブロック」とは、痛みに関連した部位に薬剤を注射して、痛みを取り除く治療法です。

神経ブロックに使われる薬剤は主に局所麻酔薬です。局所麻酔薬は歯医者さんの治療でも日常的に使われ、作用は一時的です。尚、局所麻酔薬は麻薬ではありませんし、依存性もありません。

神経ブロックに局所麻酔薬を用いると、鎮痛作用だけでなく血管拡張作用も生じます。（ポカポカする温かさを感じることもあります。）

痛いところの血行は悪いことが多く、痛みが続けば痛みの原因物質はどんどん貯留していきます。（慢性痛：痛みの悪循環）しかし神経ブロックを行うと、痛いところの血管も拡張して血行は改善されます。神経ブロックで良くなった血行により、貯留していた痛みの原因物質は『洗い流されて』いきますので、頑固な痛みでも改善することに繋がります。さらに繰り返し行えば、最終的に『慢性痛：痛みの悪循環』を断ち切れることにもなるのです。

→『神経ブロック』は、自然の回復力を促す治療法とも言えます。

③ ペインクリニックの必要性は？

痛みの治療は、診断や手術に対して遅れているのが現状です。さらに痛みの治療は、麻薬を含む鎮痛薬をはじめとする薬物療法に偏っていると一言でも過言でなく、薬物療法が効かなかったら（一発勝負の）手術か我慢するという流れが主流だと思います。

現在、薬物療法の限界と副作用、手術療法の限界などから、その中間に位置する神経ブロック療法が注目されています。

臨床各科の医師が「神経ブロック」を修得し日常臨床で効果をあげることが出来たら理想ですが、まず不可能でしょう。なぜなら各科の医師が忙しい臨床の片手間に修得できるほど、「神経ブロック」は簡単に修得できません。

→そこで日常的に『神経ブロック』を行っている麻酔科から派生し、痛みを専門とする新しい診療科『ペインクリニック』の必要性(需要)が高まることになったのです。

④ 神経ブロックは、いつ必要か？

神経ブロックは、『最後にどうしてもなくてする治療』と誤解されがちですが…神経ブロックは決して最後にする治療法ではありません。むしろ痛みで苦しみを始める『急性期』に効果がある治療法です。手術の痛みに対して、麻酔科医は手術の前に神経ブロックを施行します。急性期の痛みと比較して、長年にわたり我慢して放置していた『慢性期』の痛みに対して、神経ブロックは一般的に効果が低いと言われています。

→痛みを我慢したり、放置することは良くない！

⑤ 神経ブロックに効果はあるのか？

神経ブロックは、針を刺されることへの恐怖(実際に使用する針は、とても細いですが…)、ブロック時の痛み(⑧参照)、さらには起こりえる合併症(⑨参照)のリスクを容しなればなりません。しかし、神経ブロックを一度でも経験した患者さんには、神経ブロックを進んで受ける患者が大勢いることは事実です。

→神経ブロックは、利益(メリット)が不利益(デメリット)を上回ることが想定される場合のみ施行され、結果的に満足される患者さんが多い。

⑥ 痛みは内服薬で抑えられないのか？

針を刺す神経ブロックと同等の効果を得られる治療があれば、それに越したことはありません。しかし、ある病態や疾患によっては、今のところ神経ブロックに勝る効果を明確にあげられないのが現実です。神経ブロックは内服薬と異なり、必要な部位のみに選択的に効果を及ぼすことから、全身への副作用が少なく、眠気や意識への影響が少ない利点があります。

→内服薬で抑えられない痛みに対して、神経ブロックは有効なことがある。(内服薬の投与量を減らせる！)

⑦ 神経を刺して大丈夫か？

簡単に言うと神経ブロックとは、神経の「道すじ」に薬剤を注射して痛みを止めることです。神経ブロックには、神経を直接目標として薬剤を注入するのではなく、神経の近くに針を進めて薬剤を染み込ませる、いわゆる「コンパートメント ブロック」とよばれる方法があります。ペインクリニックで頻繁に行われる神経ブロック(星状神経節ブロックや硬膜外ブロック)は、ほぼ「コンパートメント ブロック」です。

→神経ブロックの多くは、神経を直接刺すわけではない！

⑧ 神経ブロックは、とても痛いのか？

当院で主に使用する注射針の太さは、「0.5~0.6mm」です。一般的な採血・点滴で使用される針「0.6~0.9mm」と同等かより細いものを使用します。よって神経ブロックする部位にもよりますが、採血・点滴のほうが痛く感じる方もいます。

患者さんの痛みの状態で、ブロックの種類を決定します。軽症の患者さんには浅い部位へ注射しますので、針を刺す距離は短いです。重症になると、より深い部位への注射(針を刺す距離は長い)になりますが、最初に細い針でしっかり表面(浅い部位)を麻酔してから施行致します。

実際、「痛さ」より「怖さ」のほうが、痛みの原因になることが多いです。事前に治療内容を納得して頂いて、信頼関係をしっかり構築することが痛みの増幅を抑えることに繋がります。納得するまで、何でも質問してください。

→細い針で浅い部位から施行しますので、実際の痛み刺激は少ないです。

⑨ 神経ブロックの副作用・合併症は？

神経ブロックの副作用は、ペインクリニック学会専門医が行う限り、実際には多くはありません。一過性に筋力が落ちたり、しびれることはありますが、時間が経過すれば元に戻ります。そのため神経ブロック施行後は、一定時間、ベッド上で安静を保って頂きます。稀に注射部位に感染(化膿)や血腫(脹れ)を起こすこともあります。適切に対応すれば問題となりません。

頻度は少ないですが、起こりえる合併症として、血圧低下、徐脈、局所麻酔薬の中毒症状などがあります。

→もし緊急事態になっても、救急疾患のプロである麻酔科学会専門医が対処しますので、ご安心ください。

⑩ 神経ブロックを安全に施行するには？

当初、神経ブロックは解剖学の知識を頼りに、指の感覚で施行されていたものが多く、いわゆる「名人芸的要素」が高いものでした。当院では超音波を利用して、神経、血管、筋肉、骨などをリアルタイムで見ながら、より安全に施行できるようにしています。

→超音波画像を見ながら神経ブロックをすることにより、安全性はあがります。

⑪ 神経ブロック以外に治療法はないのか？

当院では神経ブロックによる治療だけでなく、薬物療法、ストレッチ・筋トレなどの理学療法(リハビリ)、東洋医学療法(漢方薬)も勿論選択できます。

→患者さんの状態と希望を合わせて、診療を計画します。

⑫ どんな病気が神経ブロックの適応になるか？

- 神経ブロックの最もよい適応は三叉神経痛で、診断が正しく神経ブロックが正確に行われたときは、確実に鎮痛が得られます。
- 帯状疱疹に対しては、帯状疱疹後神経痛に移行させないためにも神経ブロックは良い適応になります。

- 日常生活に支障をきたす椎間板ヘルニアは、手術の適応の有無に関わらず、神経ブロックを試みる価値は十分あるでしょう。(手術前に整形外科から依頼されること多いです。)

《主な治療対象》

腰痛 坐骨神経痛 椎間板ヘルニア ぎっくり腰 腰椎すべり症
肩や膝の関節痛 肩こり(四、五十肩) むちうち症 手足のしびれ
帯状疱疹後神経痛 肋間神経痛 手術後痛
頭痛(片頭痛、緊張型頭痛、群発頭痛) 三叉神経痛
顔面痛 顔面神経麻痺 顔面痙攣
突発性難聴 メニエール病 尿路結石の痛み など

※ 内科、整形外科、皮膚科、耳鼻科、産婦人科、歯科、接骨院など、一般的な治療で(お薬、けん引、低周波、近赤外線、レーザー、マッサージなど)、なかなか軽快せずお困りの場合、当院がお役にたてるかもしれません。ペインクリニックは新しい診療科目です。「頑固でしつこい痛み」について、お気軽にご相談してください。

尚、受診の際に他院からの紹介状、お薬手帳、レントゲンやMRIなどの画像データを持参して頂きますと、診療時間の短縮となり、服薬や神経ブロックについて、より適切な治療計画が立てれます。

《当院で行う主な神経ブロック例》

各ブロックについての詳細は、診察時に詳しく説明致します。

◎交感神経ブロック

星状神経節ブロック

硬膜外ブロック

◎体性神経ブロック

【神経根ブロック】

頸部神経根ブロック

仙骨神経根ブロック

【神経叢ブロック】

頸神経叢ブロック

腕神経叢ブロック

腰神経叢ブロック

仙骨神経叢ブロック

【末梢神経ブロック】

後頭神経ブロック

肩甲上神経ブロック

肋間神経ブロック

坐骨神経ブロック

椎間関節ブロック(頸部、腰部)

◎関節内注射

肩関節(肩峰下滑液包内、肩甲上腕関節内)

膝関節

◎トリガーポイント注射

肩こり(頸肩腕症候群)やぎっくり腰(筋筋膜性疼痛症候群)などに施行します。

→効果は神経ブロックよりマイルドですが、満足される患者さんが多く、ペインクリニックの最初の注射として広く普及しています。

※ 各ブロックは可動式の処置台、超音波を使用して安全に行います。偶発症に対して、AED、酸素、呼吸補助具、昇圧剤など救急セットは全て完備しております。